

< 論 文 >

北路軍政署の創設と大倂教

— 総裁・徐一の活動を中心に —

佐々充昭*

The Influence of the Daejyonggyo on the Establishment of the Northern
Military Administration Office Army (Bungnogunjeongseo)
—focusing on the activities of its president, Soe Il

SASSA, Mitsuaki

The number of anti-Japanese militant groups increased dramatically in the Gando region during the March 1st Movement in 1919. The largest of these was the Northern Military Administration Office Army, or Bungnogunjeongseo (formally known as the Daehangunjongsoe). The Bungnogunjeongseo was the largest force on the Korean side in the Battle of Cheongsanri, which is regarded by many Koreans as the greatest victory of the anti-Japanese independence movement. This paper clarifies that this militant group was founded upon the principles of the religious group, Daejyonggyo.

The Daejyonggyo was established in 1909 with the aim of re-inspiring the Korean people's desire for independence through worshipping Dangun, the legendary founder of the Korean nation. The Bungnogunjeongseo was formed by Soe Il, a Daejyonggyo leader, based on the Joonggwangdan, which was established in 1919. Soe Il was expected to take over the Daejyonggyo as its second spiritual leader; he also served as the president of the Bungnogunjeongseo. The majority of Bungnogunjeongseo membership was comprised of Daejyonggyo believers, many of whom were former soldiers from the Korean Empire Army. The Bungnogunjeongseo was organized like the armed forces, based on the Daejyonggyo faith under Soe Il's leadership. By binding religion and the military so tightly together, the Bungnogunjeongseo was able to develop into an organization so well commanded that it could effectively challenge the Japanese regular forces.

* 立命館大学文学部教授

Keywords : Northern Military Administration Office Army (Bungnogunjeongseo),
Daehangunjongsoe, Daejyonggyo, Soe Il, Battle of Cheongsanri

キーワード : 北路軍政署、大韓軍政署、大倭教、徐一、青山里戦闘

はじめに

一九一〇年の韓国併合後、朝鮮の独立運動家たちの多くは海外へ亡命し、朝鮮人僑胞たちが多数集住する地域を拠点に抗日独立運動を展開していった。その中でも、豆満江を越えた北岸の「間島」と呼ばれる地域は、抗日独立運動の最大の拠点となった。間島には一九一〇年頃にすでに一〇万人の朝鮮人が居住し、同地における朝鮮人の割合も八〇%に達していた¹⁾。その後、一九一九年三月に三・一運動が起こると、民族独立運動を行うために間島へ渡る人々が激増し、日本側と直接的な武力闘争を行うための抗日武装団体が雨後の筍の如く組織された。こうして組織された抗日武装団体の中で、本稿では特に北路軍政署（正式名称は大韓軍政署）に焦点をあて、その創設の経緯について考察する。

北路軍政署は、間島地方で活動していた義兵や元軍人らが結集して一九二〇年五月に中国吉林省汪清県で組織された。この団体は、三・一運動直後に間島で結成された抗日武装団体の中で最大規模にしてかつ最強の戦闘力を誇った。また、この団体は、一九二〇年一〇月に起こった青山里戦闘において、その主力部隊を構成したことで知られている。この戦闘は、抗日民族独立運動が極度に高揚した三・一運動直後の時期に、間島の青山里一帯（現在の中国吉林省和龍県）において朝鮮の抗日武装集団と日本軍との間で繰り広げられたものである。朝鮮側の記録によると、この戦いで朝鮮の抗日独立軍は日本の正規軍を殲滅させる大勝利を収めたと報告されている²⁾。朝鮮の独立運動家たちは、解放前の時代からこの戦いを「青山里大捷（「大捷」は「大勝利」という意味）」と称し、抗日独立闘争の輝かしい成果として大々的に喧伝した。解放後、南北分断によるイデオロギー対立の中で、南の大韓民国では、右派民族主義系列の抗日運動を民族独立運動の主流とみなしてきた。このような歴史認識の中で、青山里戦闘は、大韓民国臨時政府の傘下に編入された朝鮮独立軍が日本の正規軍に正面から対峙した戦闘として位置づけられ³⁾、抗日独立戦争史上、最大の戦果をあげた戦いと見なされた。現在の韓国でも、青山里戦闘は抗日独立戦争の輝かしい歴史を証明してくれるものとして高く評価されている。実際、韓国の小中高等学校の歴史教科書の中では、解放前の通称である「青山里大捷」という名称がそのまま使用され、愛国心を育成するための必須学習事項として必ず記載されるほどになっている⁴⁾。この青山里戦闘において、その主力部隊を構成したのがまさに北路軍政署であった。本稿では、この北路軍政署がどのようにして創設されたのか明らかにする。

韓国の学界では、解放直後から北路軍政署に関する数多くの研究が行われてきた⁵⁾。その際、

北路軍政署に所属した構成員たちの多くが大倭教という宗教教団の信徒たちであった事実が早くから指摘されてきた⁶⁾。例えば朴永錫は、「北路軍政署は…檀君を中心とする大倭教の救国抗日民族独立運動団体として徹底的に精神武装した団体であると同時に、民族軍隊の性格を帯びた強力な独立軍部隊であった」⁷⁾とし、「青山里戦闘において北路軍政署の独立軍が大勝を収めたのは…平素からの強靱な訓練と大倭教を土台とした愛国的精神力に起因した」⁸⁾と述べている。また、朴烜も、「北路軍政署の主要構成員の大部分は大倭教を信奉しており…大倭教徒たちは朝鮮人の民族精神、すなわち檀君を中心とした民族精神を培養することによって日帝を排斥し、理想国である倍達国を地上に再建しようとした」⁹⁾と述べている。

実際、北路軍政署の総裁をつとめて同団体を統轄したのは、大倭教の幹部をつとめた徐一という人物であった。徐一は、間島地方に設立された大倭教の支部である東道本司を主管しながら、大倭教に関する各種の経典・教理書の編纂に尽力し、大倭教の次期教主となることを期待されるほどの人物であった。このことから分かる通り、北路軍政署は大倭教の教団基盤の上に組織された軍隊組織であり、構成員たちを一つに団結させた結束力も大倭教が唱道した檀君民族主義によってもたらされたものであった。しかしながら、韓国の歴史教育の現場において、北路軍政署と大倭教との関係が重要視されることはあまりない。政教分離が進んだ現代の韓国では、抗日独立闘争で最大の戦果をあげた戦闘の成果を、特定の宗教教団と結び付けて評価しようとするのが暗黙裏に忌避されているからである。しかしながら、最近では、歴史的な事実を正確に伝えようとする風潮を反映してか、北路軍政署と大倭教との関連性に言及する教科書もでてきている¹⁰⁾。本稿では、このような動向を踏まえた上で、青山里戦闘の主力部隊となった北路軍政署の設立経緯について、大倭教との関連に焦点を当てながら、同団体の総裁をつとめた大倭教徒・徐一の活動を中心に、大倭教側の資料¹¹⁾と日本側の記録文書¹²⁾にもとづいて明らかにする。

一. 間島における大倭教施教室の設置と教団本部の移転

北路軍政署の創設について論じる前に、まず大倭教とはどのような宗教団体であり、また、間島地方でどのようにして教勢を拡大していったのか述べておきたい。

大倭教は一九〇九年二月五日（旧暦一月一日）に、羅喆という愛国志士によって創設された宗教教団である。朝鮮民族の始祖である檀君の降臨によって民族固有の宗教がもたらされたとし、創設当初は檀君教と称した。また、断絶してしまった民族宗教である「神教（＝檀君教）」を復興させるという意味で、教団創設のことを特に「重光（＝光の復興）」と称した。檀君教は民族独立を全面に掲げたために、創設当初から日本側当局の厳しい監視と弾圧を受けた。一九一〇年の韓国併合により朝鮮が日本の植民地となると、羅喆は日本側の取り締まりを避けるために、教団名から「檀君」の名を消し、大倭教と改称した¹³⁾。

その後、朝鮮総督府の弾圧が日に日に厳しくなったために、教団の将来を憂慮した羅喆は、朝鮮人僑民たちが多数居住していた間島地方への進出を試みた。教団側の記録によると、一九一〇年一月二六日（旧暦一〇月二五日）に間島の青山里付近（当時の所在地住所は中国吉林省和龍県三道溝）に教団の会堂が設置されている（『六十年史』一六五頁）。これに関しては、日本側の報告書にも次のような詳しい記録がある。

茲ニ注意ヲ要スヘキモノハ大倭教（檀君教トモ）ニシテ明治四十三年十一月頃ヨリ京城本司所ヨリ施教師トシテ派遣シタル鮮人朴昌益ナルモノハ平崗上里社青山里青湖北路第二十七号安泰鎮（安重根ノ近親ナリト云ウモ明ナラス）ノ寄附ニ係ル家屋ヲ施教堂ニ充テ表面改過僣善ヲ目的ト称シ其ノ実排日ヲ鼓吹シ漸進主義ヲ執レルト云フ¹⁴⁾

この記録から、一九一〇年一月頃、間島の青山里地方に大倭教の教会堂が設けられたことが確認できる（教団側ではこれを青湖施教堂と称した）。その後、青山里は間島における大倭教の活動拠点となっていき¹⁵⁾、羅喆は一九一六年に死去するまで、主にこの地域を拠点として大倭教の布教活動を行った¹⁶⁾。これについて、日本側の記録にも、「檀君教信者ハ約千名ニ達シ教民羅喆ナルモノ目下平崗上里社三道溝ニ教会ヲ設ケ…各所ニ分会堂ヲ設ケ熱心布教ニ従事シ居レリ。在住鮮民ハ其徳ヲ慕ヒ入会スルモノ多シ」¹⁷⁾と記されている。

また、一九一〇年代の間島における大倭教の活動については、大倭教徒である趙昌容の日記に詳しく記されている。彼の遺稿集である『白農実記』には、一九一二年から一三年まで間島の大倭教施教堂に滞在していた時の日記が「北長島視察記」として収録されている¹⁸⁾。この日記によると、施教堂では毎週、敬拝式が執り行われ、各施教堂の布教活動が非常に盛況であることが報告されている（二四五～五頁）。未信者の者が敬拝式に参列してそのまま入信する場合も多数あった（二五一頁）。間島一帯の各地から書簡が寄せられ布教状況が報告されているが、それによると、豆満江流域全体が大倭教信者となり、一日に百人以上が入教する場合もあり（二五五～六頁）、時には一洞四〇戸がいっせいに入信することもあったと報告されている（二五八頁）。一九一二年の旧暦一〇月三日には開天節の慶節行事が行われたが、特に盛況であった。その様子について、この日記には次の様に記されている。すなわち、男女信徒たちが七〇〇余人参集し、わざわざ遠方から来た者も三〇〇人以上おり、施教堂の施設も、天真殿・天宮・修道室・敬拝室・姉妹敬拝室・学徒唱歌室・經典講義室・典務事務室・外交接室などを備えた広大なものであった。慶祝の儀式は厳粛に執り行われ、開式の願祷は羅喆自身が行い、その「血泣至誠惻怛の辞」を聞いて信徒たちは皆いっせいに感涙でむせび泣いた。また、学生たちの歌唱や中国風の音楽演奏も行われ、酒茶も振る舞われた。その光景を見て、即時に一〇〇余人が信徒となった。また、夜には花灯千余个が灯され、学生の唱歌が歌われ、礼員たちは相互に娯楽遊技を楽しみながら夜を徹した（二五七～八頁）。

教主羅喆自身によるこのような精力的な布教活動の結果、間島における大宗教の信者数は急速に増えていった¹⁹⁾。それに反して、朝鮮国内では総督府側の監視と弾圧が日に日に厳しくなっていき、教勢は伸び悩みを見せた。このような状況をみて、羅喆は一九一四年六月に青湖施教堂（吉林省和龍県三道溝の青山里附近）に大宗教の総本部を移転したのである。

二. 大宗教団内における徐一の地位

大宗教の間島進出に伴って、大宗教徒たちによる抗日独立運動も活発化していった。そして、間島地域における大宗教徒たちの抗日独立運動を主導したのが、文武兼備の独立運動家として知られた徐一（一八八一～一九二一：号は白圃）であった。徐一は、一八八一年三月二五日（旧暦二月二六日）に咸鏡北道慶源郡安農面金熙洞で生まれた²⁰⁾。二二才（一九〇二年）の時に咸一師範学校を卒業した後、一〇年間郷里の小学校で教鞭をとった。その後、韓国併合後の一九一二年に間島へ亡命した後、吉林省汪清県に朝鮮人のために設けられた僑民学校である東明学校の校長をつとめた。一九一〇年代に間島へ移住した朝鮮人の出身地を見ると咸鏡道出身者が圧倒的に多く²¹⁾、徐一は咸鏡北道出身の英傑として、間島の朝鮮人僑民社会の中で指導的な役割を果たしていったものと考えられる。

徐一は一九一一年七月頃に間島で羅喆と接触し、一九一二年一〇月に大宗教に入信した。翌年一〇月に靈戒を受け、參教に昇進して施教師に任ぜられた。教団側の記録によると、徐一は「国祖檀君を教祖と仰ぐ大宗教の布教が即ち祖国の独立運動になる」と考え、「鬼泣神哭する感化の道力によって一日に一三〇〇名に宣道説得する奇跡の大業績を残し」、わずか三年の間に数万名の教徒を獲得したと記されている（『六十年史』三九〇頁）。いささか誇張の感があるが、日本側の記録にも、「大宗教ハ…当時ハ北道支司ヲ汪清ニ置キ故徐一ハ宗理監トシテ之ヲ主宰シ同教ノ布教ニ従事シタル結果間島地方ニ於ケル信徒総数ハ一時一万五千ノ多数ヲ算シタル」²²⁾と報告されている。このような記録から、徐一の感化力が如何に大きかったのか窺い知ることができる。こうして多数の信徒を獲得した徐一は、一九一五年に知教に昇進して東一道本司の典理に任命され、翌一九一六年四月には尚教に超秩され総本司典講に任ぜられた²³⁾。さらに、彼は教主の羅喆から後継者候補の一人に選ばれ、金教献（羅喆の死後、第二代教主に就任した）と共に経閣の特選司教に任ぜられ、教団本部の天宮（檀君の御真を奉斎した礼拝所）で靈選儀礼をとり行った（『六十年史』三九〇頁）。こうして徐一は、入信後わずか五年足らずで大宗教の最高位階に上った。

徐一がこのように教団内で高い評価を受けたのも、彼が大宗教教理の体系化を行い、經典の解釈書を多数著述した点にあった。幼少の頃から金魯奎の門下として儒学を修めた徐一は、特に易の思想に通暁し、数多くの教理解説書を残した。大宗教教理の核心である「三一原理」について詳論した『会三経』をはじめ、『三一神誥図解講義』『九変図説』『真理図説』『三問一答

(上下編)』『神理註解』『宗旨講演』『神事記節安考定』などの教理書は、すべて徐一が著述したものであった。その中でも『会三経』は、初代教主の羅喆が著した『神理大全』、第二代教主の金教献が著した『神檀実記』とともに、教団内において最も重要な著述として位置づけられている(『六十年史』三九三頁)。

また徐一は、初代教主の羅喆から特に篤い信任を得ていた。これに関しては興味深い逸話が伝えられている。羅喆は朝鮮総督府による宗教弾圧に抗議するために、朝鮮時代からの民間檀君信仰の拠点であった黄海道九月山の三聖祠において一九一六年に自決した。その後、大倭教では、羅喆が死去した旧暦八月一五日を「嘉慶節」と称し、教団記念日の一つに指定した。これは、死去の前に羅喆が自ら詠んだ漢詩の「玉殿金花○○日」の中で忘れてしまった○○の二文字を、後日、徐一が夢の中で「嘉慶」の二文字であることを悟り、羅喆に知らせたことになんだものであるとされている²⁴⁾。また、徐一は自らの堂号を「三兮堂」とした。これは、羅喆の堂号である「一之堂」を継承し、大倭教の「三一哲学」を完成させるという意味を込めたものであり、さらに大倭教の教理である「分三合一、会三帰一」を意図して命名したものであった。また、徐一が著述した『三門一答』は、大倭教の三一哲学の教理を問答形式で明らかにしたものであるが、そこでは悟りに導いてくれる主体として「一意子」が登場し、悟りを得る対象として「三思生」が登場する。これは、各々「〔一之堂〕羅喆」と「〔三兮堂〕徐一」を意味するものであるとされている²⁵⁾。これらの逸話から、徐一と羅喆の両名が、大倭教に対する深い信仰心で結びついていたことが確認できる。

徐一が教団内でいかに信頼を寄せられていたかについては、大倭教第二代教主となった金教献との関係を見ても確認することができる。一九一六年に羅喆が死去した後、羅喆本人の遺言によって金教献が第二代都司教(教主)に就任した²⁶⁾。しかし、金教献は一九二〇年に都司教の座を徐一に移譲しようとしたのである。間島地方で絶大な指導力を発揮していた徐一の方が、大倭教の教主としてより相応しいと判断したからであった。しかし、この時はちょうど三・一運動が勃発した直後であり、間島にいる独立運動家たちが一斉に武装蜂起し、朝鮮国内への侵攻を準備していた時であった。そのために、徐一は五年間の猶予をくれるように金教献に頼んだ。結局、徐一は一九二一年に避難先であった中国黒龍江省密山県で非業の死を遂げたために大倭教教主の座につくことはなかった。これらの逸話を通じて、徐一が次期教主の地位を囑望されるほどの人物であったことが確認できる²⁷⁾。

三. 間島における徐一の抗日民族独立運動

徐一は大倭教徒としての活動に尽力する傍ら、祖国光復を目指した抗日独立運動に専心していった。大倭教は純粋な宗教団体というよりも、朝鮮民族の独立を教団理念に掲げた抗日独立団体としての性格を強く有していた。大倭教に入信した徐一も、一九一一年三月に間島の義兵

たちを糾合して、吉林省汪清県で重光団という独立団体を組織した²⁸⁾。この団体の名称は、大倭教（檀君教）の復興を意味する「重光」にちなんだものであったとされる²⁹⁾。重光団の団長は徐一がつとめたほか、玄天黙・白純・朴賛翊・桂和・金秉徳・蔡五・梁玄・徐相庸など、団員の多くは咸興北道出身の大倭教徒たちであった³⁰⁾。彼らは後に、北路軍政署の主要メンバーとなっていった。その中でも大倭教の幹部であった玄天黙は、常に徐一の腹心格としての働きをした³¹⁾。

また、重光団では私立学校をつくって、間島に住む朝鮮人僑民たちの民族教育を積極的に行っていた。この教育活動によって、特に大倭教本部の置かれた和龍県と重光団が創設された汪清県に大倭教系の民族学校が数多く設立された³²⁾。徐一自身、汪清県で東明学校を運営した他、玄天黙も和龍県で東一学校や青一学校の校長をつとめた。これと関連して、日本側が一九二〇年一〇月に報告した、間島内の朝鮮人系民族学校に関する調査がある。この報告書には「不逞思想ノ鼓吹ニ努メ且不逞行動ノ秘密集會場所タル学校調査別表」という表が載せられている。それを見ると、延吉県管内の全一七校について「天主教系一、耶蘇教系六」とあり、和龍県管内の全一九校について「天主教系一、耶蘇教系一、大倭教系三」、汪清県管内の全五校について「大倭教系四」となっている³³⁾。この記録からも、間島内において、延吉県ではキリスト教の勢力が強い一方で、和龍県と汪清県では大倭教の勢力の方が強かった事実が確認できる。

実際、間島内の和龍県と汪清県では、すでに一九一〇年代から大倭教徒たちによる抗日運動が展開されていた。これに関して、日本側の記録を見ると、一九一六年一月一日に行われる日本人の新年祝賀会に乗じて暴動を起し、間島方面の日本領事館や豆満江沿岸地域を襲撃しようとする計画があったことが報告されている。この記録では、李碩大という者が首謀者となり、各地方の同志たちを汪清県大坎子と和龍県青山里と長白街の三ヶ所に集合させて軍容を整える計画であり、軍資金の調達に関しては、部下約二十名を一団として金銭を没収し銃器を購入しようとしており、「京城二趨キタル羅喆（大倭教青山里都司教）モ同ジク資金ノ調達ヲ目的トセルモノナリトノ説アリ而シテ今回暴動計画ノ中心ハ大倭教徒ナリ」と報じている³⁴⁾。このような記録から、すでに一九一〇年代の中頃から青山里一帯において、大倭教徒を中心とする抗日武装闘争の準備が進められていたことがわかる。

四. 北路軍政署の設立と旧大韓帝国軍人たちの加入

一九一九年三月に三・一運動が起こると、重光団は本格的な武装闘争を行うために、同年五月に大韓正義団として改編された。しかし、大韓正義団の団員たちは、軍事に関しては非専門家がが多く、武装闘争を実際に行えるような状態になかった。徐一はこの問題を解決するために、旧韓末の軍人たちが多く集まっていた吉林軍政署との連合を推進した。吉林軍政署は一九一九年三月頃に金佐鎮らを中心に組織された独立武装団体であり、団員の多くが大倭教徒であった。

徐一は一九一九年秋頃に、金佐鎮・曹成煥・朴賛翊・朴性泰ら吉林軍政署に所属する人士たちを大韓正義団の団員として迎え入れた³⁵⁾。この時、特に旧韓末の時代から英雄として知られていた金佐鎮が加入したが、このことは大韓正義団にとって大きな力となった³⁶⁾。その後、大韓正義団は一九一九年一〇月に軍政府として改編され、本格的な抗日武装闘争の準備を始めた。さらに同年一二月には、上海に設けられた大韓民国臨時政府の命令（國務院第二〇五号）に従って、大韓軍政署（通称名は北路軍政署）という名称に変更され³⁷⁾、これ以後、臨時政府の指示に従うことになった³⁸⁾。

北路軍政署の司令部は中国吉林省汪清県西大坡十里坪より約三里の山奥に置かれ、兵員約一二〇〇名を収容することのできる八棟の軍幕舎が建てられたほか、士官錬成所も設けられた。これだけ規模の大きな団体であったために、日本側は密偵を使い、軍政署の位置、兵営建設の所在地、哨兵の配置、武器並に兵員数について詳細に把握していた。特に注目したいのは、武器の数と組織体制である。これに関して、日本側の記録には、「軍政署ニ在ル武器ハ小銃約六百挺、拳銃約式百挺、機関銃約參門、手榴彈（十二個入）五箱、彈丸一〇ニ付參百發ニシテ現在兵ハ約六百ヲ算シ…武官学校学生ハ約三百五、六十名在学中ノ学生ハ六ヶ月卒業ナレバ来ル九、十月頃卒業ス可キ筈ナリ」と報告されている³⁹⁾。また、軍政署の兵士たちは、周辺の住民や朝鮮国内から渡ってきた青年たちから選抜され、彼らには本格的な軍事訓練が施された。彼らは「黄色ノ軍服ヲ着シ旧韓国八卦ノ徽章ヲ附セル軍帽ヲ戴キ…特ニ精神教育世界各国ノ独立又ハ革命ニ関スル歴史及日韓歴史的経緯ヲ講シテ志氣ヲ振作スルト共ニ日本ニ対スル敵愾心ヲ鼓舞」⁴⁰⁾させ、「日本人ノ模形ヲ作り此ヲ射的トシテ居」た⁴¹⁾。独立軍の編成は、一個小隊を五〇名とし、二個小隊を一個中隊とし、二個中隊を一大隊とした。兵力規模は一九二〇年八月頃に一六〇〇名を超えた。こうして北路軍政署は、名実共に間島地方における最も強力な武装独立団体に発展していった⁴²⁾。

北路軍政署の組織は、大きく総裁部と司令部に分けられた。総裁部は、主に独立軍の管理や外交活動を担い、司令部は日本軍と実際に対戦する実戦部隊であった。総裁部では徐一が総裁をつとめ、玄天黙（副総裁）、金秉徳（総裁府秘書長）、桂和（財務部長）、鄭信（人事局長）、李鴻来（募捐局長）⁴³⁾らが所属した。また、司令部では、金佐鎮が総司令官として指揮をとり、李章寧（参謀長）、金奎植（師団長）、羅仲昭（参謀副長）、李範奭（研成隊長）、鄭寅哲、朴寧熙（武官）、李敏華（将校）、金勲（将校）、白鍾烈（将校）、金昌洙らが所属した。特に司令部は、吉林軍政署、西路軍政署の新興武官学校、大韓帝国の軍人出身者など、専門的な軍事教育を受けた軍人たちで組織された。また、これら北路軍政署の要員の多くが大倭教徒たちであった（〔表1〕を参照）⁴⁴⁾。これに関して、日本側の記録にも、「大倭教（別名檀君教）…同教ノ信徒中ニハ過激ナル排日思想ヲ有スルモノ多キカ如ク現ニ不逞鮮人団中ノ優勢ナル大韓軍政府ハ同教ノ信徒ニ依リテ組織セラレタルモノナリ」⁴⁵⁾と報告されている。また、青山里戦闘を主導した金佐鎮と洪範図の両名も大倭教の信徒であった。大倭教側の記録を見ると、金佐鎮は渡満後、徐

一の指導下で大倭教を信奉したことが記されている⁴⁶⁾。また、洪範図も大倭教に入信していた⁴⁷⁾。大倭教側の資料によると、洪範図は、彼の秘書兼参謀長であった虎翼金嘯林（別名虎將軍としてその武勇を轟かせた）と共に大倭教徒であったと記されている⁴⁸⁾。また、日本側の記録によると、一九二〇年一〇月一七日に「軍政署副総裁玄天黙ノ斡旋ニヨリ洪範図ト金佐鎮トノ提携成レリ」と報じている⁴⁹⁾。玄天黙は、徐一の右腕として働いていた大倭教の幹部であったことから、洪範図が北路軍政署に合流したのも大倭教徒同志の絆によるものであったと考えられる。

北路軍政署の内実を伝える最も重要な史料の一つとして、『司令部日誌』（幕賓李楨『司令部日誌』第一号、大韓民国二年）がある⁵⁰⁾。これは、北路軍政署に所属する李楨という人物が、間島の日本領事館で取り調べを受けた際に押収されたものである⁵¹⁾。北路軍政署が青山里方面に移動を開始する直前の頃に書かれたものであり、一九二〇年七月一日（旧暦五月一六日）から九月一三日（旧暦八月二日）にかけて、北路軍政署の司令部で起こった出来事がまとめられている。この日誌を所有していた李楨も大倭教の信徒であった⁵²⁾。

この日誌を見ると、北路軍政署が完全なる軍隊組織であり、組織の頂点に立つ総裁にすべての命令権と指揮権が統轄されていたことがわかる。ただし、総裁の徐一は一九二〇年に武器調達と外交交渉のために間島を離れ、ロシア領内で活動を行っていた。この日誌によると、徐一は九月七日（旧暦七月二十五日）に軍政署へ帰還しており（三八七頁）、それまでの間は、副総裁の玄天黙が全権を代行指揮していた。例えば、一九二〇年七月一日（旧暦五月一六日）の条では、「総裁徐一閣下代理副総裁玄天黙閣下命令ニテ警備隊十人ヲ総裁府ニ派遣ス…司令官金佐鎮閣下ヨリ嚴重ナル訓示有リシ後許活ハ三週日間総裁府ニ警護シテ本営ニ来赴セヨトノ命令有レリ」（三七八頁）と記されている。また、北路軍政署では厳格な軍規が定められ、それに違反した場合、懲罰が下された。例えば、七月三日（旧暦五月一八日）の条には「陸軍刑法同懲罰令各四十部ヲ警信局ニ送付ス」（三七九頁）とあり、また、七月五日（旧暦五月二十日）の条には「第一学徒隊第一区隊機関銃附学徒金鍾権ガ武器保管ヲ懶惰ニシテ陸軍懲罰令第三節第二十五項官給物品措置拭浄法ニ違反セシヲ以テ重営倉二日ニ処ス命令頒布後直チニ執行セヨ」（三八〇頁）と記されている。このことから、北路軍政署が正規の軍隊と遜色ない命令・指揮系統を有しており、特に武器の保管・管理に関しては細心の注意が払われていたことがわかる。また、この日誌で特に注目したいのが、士官錬成所の卒業式の様子が詳細に記録されている点である。これに関しては、九月九日（旧暦七月二十七日）の条に次のように記されている。

是日午前十時本営ニ於テ第一回士官錬成所卒業式ヲ挙行ス職員ハ満座シ来賓ハ雲集セリ満面ニ喜色ヲ帯ビシ卒業生一同ハ敬礼ヲ上ゲ愛国歌ヲ唱フ所長閣下ノ開式礼辞ト総裁副総裁両閣下ノ訓示有リ次ニ来賓トシテ曹成煥、金赫両氏ノ祝辞及最優等金玉鉉君ノ答辞有リシ後所長閣下ノ卒業状授与有リテ最後満場一致ニテ万歳声裏ニ閉式ス午後七時ニ至リテ余興トシテ独

表 1 北路軍政署に所属した大倅教徒一覧

No.	姓名(生存年)	号	職位	大倅教団内における位階・職責等
1	白純 (1864～1937)	隱溪	未詳(武器調達)	參教(1911)、知教(1913)、東一道本司所属(1917)、尚教(1918)、正教加大兄(1923)、司教(1925)、都司教委理(1927)、総本司典理(1928)
2	玄天黙 (1866～1928)	白醉	副総裁	參教(1911)、知教(1913)、尚教(1917)、総本司典範(1921)、正教加大兄(1927)
3	羅仲昭 (1866～1925)	抛石	參謀副長、士官鍊成所教授部長	東一道本司所属(1917)
4	尹復榮 (1868～1966)	華田	吉林分署顧問	北一道本司所属(1917)、參教(1922)、知教(1924)、経議院參議(1946)、尚教(1946)、正教加大兄(1947)、元老院參議(1950)
5	曹成煥(曹煜) (1875～1948)	晴箕	軍事部長	総本司典理代辦(1924)、正教加大兄(1929)、司教加道兄(1950 追崇)
6	金懋 (1875～1939)	吾石	參謀、最高參議	參教(1914)、知教(1917)、西一道本司所属(1917)
7	徐一 (1881～1921)	白圃	総裁	參教・施教師・知教(1913)、東一道本司典理、尚教・総本司典講・経閣特選司教(1916)、
8	李章寧 (1881～1932)	白于友松	參謀長、士官鍊成所教官	東一道本司所属(1917)(注)臨時政府を主導した李東寧の三従弟
9	金奎植 (1882～1931)	蘆隱	歩兵大隊長、士官鍊成所教官	総本部巡教員(1910)
10	桂和 (1884～1928)	白困	財務部長	參教・知教(1916)、尚教(1918)、総本司典講(1924)、正教加大兄(1926)
11	尹珽鉉 (1888～未詳)	一野	度支局長	參教(1911)、知教(1914)、尚教(1917)、正教加大兄(1938)、北一道本司宣範部領及経議院長、総本司典講
12	李鴻来 (1888～1923)	一秋	募捐局長	東一道本司所属(1917)
13	金佐鎮 (1889～1929)	白冶	総司令官	東一道本司所属(1917)
14	金秉徳(金星) (1890～1946)	—	総裁府秘書長	東一道本司所属(1917)、參教(1924)
15	崔海(崔海日) (1895～1948)	檀史	旅団長	東一道本司所属(1917)、知教(1926)
16	李楨 (1895～1943)	晦峯	士官養成所速成科修業	參教(1918)、東二道本司宗理監正(1922)、知教(1942)、尚教(1946 追崇)
17	朴寧熙(朴斗熙) (1896～1930)	劍秋	參謀副官、学徒団長(司令官副官兼任)	東一道本司所属(1917)、參教(1922)
18	姜鎔求 (1896～未詳)	檀野	警信局長	參教(1921)、南一道本司計理監正(1922)、桂善施教堂賛務(1923)、知教・尚教・総本司賛理(1946)、総本司典講(1950)、正教加大兄・元老院參議(1955)
19	鄭信(鄭潤) (1898～1931)	一雨	人事局長	東一道本司所属(1917)、北一道本司主管(1922)、參教(1925)、知教(1928)

20	李範奭 (1900～1972)	鉄驥	研成隊長、士官錬成所教官	参教(1920)、知教・経学院参議(1946)、尚教(1949)、正教加大兄・元老院参議(1960)、司教加道兄(1968)
21	呉祥世 (未詳～1937)	清湖	第4中隊長、第二学徒隊長署理	知教・永一施教堂賛務(1934)

出典:『六十年史』、『倥門栄秩』(大倥教総本司所蔵、未公刊)、玄圭煥『韓国流移民史』(語文閣、1969)、『韓民族文化大百科事典』(韓国精神文化院、1991)の他、朴恒『満洲韓人民族運動史研究』(一潮閣)の表23「北路軍政署総裁府の主要幹部一覧表」(101頁)と表24「北路軍政署司令部の主要幹部一覧表」(104頁)を参照した。

立魂ト云ウ題目ニテ演劇ヲ開キ興味津々タル大観景ヲ奏セリ(三八八頁)

この記事から、士官錬成所においても軍隊と遜色のない垂直型の命令体系が整っており、日本軍との実戦を控えて独立軍兵士たちの志気が極度に高揚していた様子がよく伺える。

このように北路軍政署は、まるで近代国家の軍隊のように体系的に組織されていた。その理由は、旧大韓帝国の軍人が多数いたからであった。例えば、北路軍政署の参謀副長と士官錬成所の教授部長をつとめた羅仲昭(〔表1〕のNo.3)は、一八八二年武科に及第した後、大韓帝国の武官学校に入学した。その後、国費留学生に選抜されて日本陸軍士官学校に留学し一八九八年に卒業した。帰国後、鎮衛隊副尉をつとめたが、一九〇五年の乙巳条約(第二次日韓協約)締結を機に間島へ渡った。彼は、旧韓末時代の六鎮の一つである茂山を守備した中隊長として活躍し、その勇敢さから「羅飛将」という別名で知られ、名将として称賛された⁵³⁾。北路軍政署の師団長として士官錬成所の教官をつとめた金奎植(〔表1〕のNo.9)も、大韓帝国の陸軍参尉をつとめた人物であった。一九〇七年に韓国軍隊が強制解散されると、彼は江原道鉄原で義兵運動を展開した。その後一九一〇年に間島へ渡り、別名「虎將軍」と呼ばれるほどの活躍を見せた。また、北路軍政署の参謀長として士官錬成所の教官をつとめた李章寧は、大韓帝国の陸軍武官学校を卒業した後、一九〇〇年に陸軍参尉、一九〇三年に副尉となった。一九〇七年に韓国軍隊が解散されると、中国奉天省柳河県三源堡へ渡り、新興武官学校の教官をつとめた。さらに、北路軍政署の軍事部長をつとめた曹成煥も、一九〇二年に陸軍武官学校に入学している。そこで彼は、腐敗した軍部の肅清を計画して発覚し、その首謀者として無期懲役に処された。その後、三年目に勅令で特赦されて参尉に任命されたが、国家が非常時であることを憂いて官職を辞任した(『六十年史』八二三頁)。そして、〔表1〕を見ると分かるとおり、彼らは皆、大倥教の信徒であった。その他にも、旧大韓帝国の軍人出身者として、朴斗熙(参謀副官)・洪忠熹(第二中隊長兼大隊長署理)・金燦洙(第三中隊長)らがいた⁵⁴⁾。このように、旧大韓帝国の軍人であった大倥教徒たちが多数参画することにより、北路軍政署は民族精神と軍事精神が強固に結びついた強力な軍隊を組織することができたのであった。

おわりに

以上、本稿では、北路軍政署の創設経緯について考察した。北路軍政署は、朝鮮における抗日独立闘争史上、最大の戦果を取めたとされる青山里戦闘で主力部隊をなした団体であった。北路軍政署は、大倭教という朝鮮民族の始祖檀君を求心点とする民族宗教の基盤の上に組織された軍隊組織であった。そのことは、北路軍政署の構成員たちの多くが大倭教徒であったことと、北路軍政署の総裁をつとめた徐一が、大倭教の第二代教主を期待されるほど篤実な大倭教徒であったことから確認できる。

一九二〇年一〇月に起こった青山里戦闘は、朝鮮国内への本格的な進攻を目指して戦闘力を蓄積してきた朝鮮独立軍と、それに対して大規模な攻勢をかけてきた日本軍との間で展開された戦闘であった。青山里戦闘の結果に関しては、朝鮮側と日本側の記録との間に大きな違いがあり論争的になっているが、朝鮮の抗日武装団体が日本軍と対峙して何らかの被害を与えたことは事実であった。軍隊どころか国さえも失ってしまった朝鮮人たちが、近代兵器で武装した日本の正規軍と異国の地で真っ向から対峙することが出来たのは驚くべきことであった。それが可能となったのも、北路軍政署において軍事面を主導した幹部たちの中に、旧韓末時代に大韓帝国の軍人であった者が多数いたからである。彼らは軍事に関する専門知識を有しており、日本軍と実戦で戦える兵士たちの養成に長けていた。それだけではなく、彼らは大倭教の信仰にもとづく徹底した民族独立精神を有していた。北路軍政署では、大倭教幹部の徐一の指導下において、檀君信仰によって培われた愛国心という精神的な土台の上に、大韓帝国の軍隊と遜色の無いほどよく規律化された組織が構築されていった。大倭教という民族宗教と旧大韓帝国の軍隊とが結合した、所謂「宗教と軍事が一体化した」団体であったために、北路軍政署は日本の正規軍と対峙することができるほどよく統率された組織となることができたのである。

注

- 1) 李盛煥『近代東アジアの政治力学－間島をめぐる日中朝関係の史的展開』（錦正社、一九九一年、四〇〇頁）。
- 2) 青山里戦闘の結果については、日本側の記録と朝鮮側の記録との間に大きな隔たりがあり、論争的になっている。紙幅の制約上、本稿では、敢えてこの問題に触れないことにする。これに関しては、別稿にて詳しく論じる予定である。
- 3) 青山里戦闘に対する大韓民国臨時政府の対応については、金容達「青山里大捷에 대한 臨時政府의 対応」（『韓国近現代史研究』第一五輯、二〇〇〇年冬号）を参照。
- 4) 日本語に翻訳された韓国の歴史教科書を例にあげると、小学校六年生の2006年度版国定教科書『社会』六―一では、第三章「大韓民国の発展」第一節「国を取りもどす努力」の項目で、三・一運動後に行われた代表的な武装独立運動として鳳梧洞戦闘と青山里大捷をあげ、「一九二〇年一〇月に金佐鎮将軍は他の独立軍部隊と力を合わせ、青山里で日本軍を大いにうち破った。この青山里大捷は、わが民族の独立戦争で取めたもっとも大きな勝利だった」と述べている（三橋広夫訳『韓国の小学校歴史教科書―初等学校国定社会・社会科探究』明石出版、二〇〇七年、一二一頁）。また、その副読本として使用された『社会科探究』六―一でも、「金佐鎮将軍と青山里大捷」という項目を設け、金佐鎮の肖像画

- と青山里大捷の様子を描いた絵画を掲載し、「兵士の数や武器などあらゆる面で日本軍がはるかに優勢だったが、…志気が高かった独立軍は、この戦闘でも大勝利を取めた」と記している（同、二六六頁）。
- 5) 北路軍政署に関する研究は、主に青山里戦闘に関する研究の一環として行われてきた。紙幅の制約上、本稿では青山里戦闘に関する先行研究の紹介は割愛する。ただ最近の研究動向として、北路軍政署に参加した独立軍兵士たちに関する個別研究がいくつか出されていることを指摘するにとどめたい。その代表的なものをあげると、以下の通りである。김민호「李範奭의 生涯와 独立運動」(『韓国独立運動史研究』第四四輯、二〇一三年四月)。김주용「李章寧의 生涯와 独立運動」(『韓国独立運動史研究』第四八輯、二〇一四年八月)。金在勝『滿州벌의 이름없는 戰士들: 青山里戰域 姜華麟 中隊長과 同志들』(혜안、二〇〇二年)。吾石金赫將軍記念事業會編『抗日武裝獨立運動家 金赫』(學民社、二〇〇二年)などがある。
 - 6) 青山里戦闘における大倭教徒たちの活躍については、大倭教宗経緯史編修委員会編『大倭教重光六十年史』(大倭教総本司、一九七一年)の第二章第一節「北路軍政署と青山里戦争」(三六九～三八一頁)に記されている。以下、本稿では本書を「六十年史」と略称し、引用頁数のみを記すことにする。
 - 7) 朴永錫『日帝下独立運動史研究』(一潮閣、一九八四年、一六一頁)。
 - 8) 同上、一六二頁。
 - 9) 朴烜『滿洲韓人民族運動史研究』(一潮閣、一九九一年、一〇八頁)。
 - 10) 例えば、韓国の検定教科書の一つである『高等学校韓国近現代史』(大韓教科書発行、初版は2003年)では、Ⅲ-三「武裝獨立戰爭の展開」の四「獨立戰爭の波が沸きあがり」の項目において、「学習の手助け」として北路軍政署に関する資料を一頁にわたって掲載している。その中の資料三「青山里! その輝かしい名前では、独立軍の何倍にもなる日本軍を打ち破った。この青山里大捷は独立戦争史上で最も光輝く大勝利であった」と述べている。そして、資料二「東北滿洲最強の獨立軍、北路軍政署」では、「北間島の汪清県では大倭教徒たちが中心となって…(北路軍政署が編成され: 引用者) 総兵力一六〇〇人にもなる東北滿洲最強の獨立軍部隊になった」と説明している。さらに、資料四には「徐一北路軍政署総裁との仮想インタビュー」が掲載されている(三橋広夫訳『韓国近現代の歴史-検定韓国高等学校近現代史教科書』明石書店、二〇〇九年、一八三頁)。本稿の巻末に掲載した〔図1〕を参照。
- 11) 特に大倭教系の研究機関から関連論著が多数発表されている。社団法人国学研究所が編集する『알소리』第六号(한뿌리、二〇〇八年)で特集「白圃徐一の生涯と思想」が生まれ、康龍權「徐一宗師와 그의 後裔들」、金東煥「白圃徐一の 生과 思想」などの論説の他、徐一の著書である『五大宗旨講演』『三問一答』の現代語訳が公表された。また、『国学研究』第一六輯(国学研究所編集兼発行、二〇一二年)でも徐一に関する特集が組まれた他、国際脳教育総合大学院国学研究院が発行する『仙道文化』第八輯(二〇一〇年)でも、「學術座談発表文: 白圃徐一の 思想과 獨立運動」という題目で特集が組まれた。その他、最近の注目すべき研究として、趙堉熙「徐一の 大倭教『五大宗旨講演』」(『崇実史学』第二九輯、二〇一二年)、白圃徐一記念事業會編『만주벌의 魂-獨立軍總裁徐一: 白圃徐一評伝 및 論文』(白圃徐一記念事業會、二〇一一年)や李東彦「徐一の 生涯와 抗日武裝闘争」(『韓国独立運動史研究』第三八輯、二〇一〇年)、同「徐一の 大倭教에서 活動과 抗日武裝闘争」『내가 몰랐던 獨立運動家十二人』(선인、二〇一三年、三九～七四頁)、신운용「大倭教人 徐一の 対日抗戰과 그 意味」(『軍事論壇』通卷第七五号、韓国軍事学会、二〇一三年秋)などがある。
 - 12) 近年、韓国では歴史資料のデータベース化が急速に進み、戦前期に朝鮮総督府や日本政府が記録した機密文書をWEB上で検索・閲覧することが可能となっている。本稿では、特に韓国の国史編纂委員会が提供している「韓国史データベース」(<http://db.history.go.kr/>)を利用した。なお、このデータベースで検索した史料の頁数に関しては、原典での頁数ではなく、PDF形式で保存されたファイル上での頁数を記すことにし、末尾に「韓国史DB、原文Image〇〇頁」と明記することにした。
 - 13) 大倭教の創設に関しては、拙稿「韓末における檀君教の『重光』と檀君ナショナリズム」(『朝鮮学報』第一八〇輯、二〇〇一年七月)を参照。
 - 14) 『韓国近代史資料集成』第九巻「間島沿海州関係(一)」「朝憲機第六四二号: 間島視察状況ノ件、鏡城憲兵分隊長報告要旨」明治四五(一九一二年)五月一三日(韓国史DBより検索引用、頁番号記載無し)。ここで言う「施教堂」とは、大倭教の支部教堂を指す。青山里戦闘において大倭教徒たちが果たした役割を考える時、青山里一帯が大倭教の最初の支部が設けられた場所であり、間島地域における大倭教の本拠地であったという事実は非常に重要である。

- 15) 教団側はこの地に関して、「青波湖とも称し満洲間島和龍県三道溝にある。大宗師（羅喆を指す：引用者）が四年間修道した場所であり、総本司及び古経閣があり、また大倭教が建てた青一学校がある。大倭教の理想郷として、後に三宗師の遺骸をすべてここに納めた」と記している（『六十年史』二七八頁）。
- 16) 拙稿「朝鮮近代における白頭山神聖観念の形成－大倭教系言論人の活動を中心に」（『韓国朝鮮の文化と社会』第一一号、二〇一二年一〇月）を参照。
- 17) 『不逞団関係雑件－朝鮮人の部－在西比利亚（三）』「朝憲機第四六三号：間島宗教状況ノ件、鏡城憲兵隊長報告要旨」明治四五（一九一二年）三月三十一日（韓国史 DB より検索引用、頁番号記載無し）。
- 18) 趙昌容「北長島視察記」（『白農実記』韓国独立運動史資料叢書第七輯、韓国独立運動史研究所、一九九三年）。以下、本書からの引用は、本文中に頁数のみを記す。
- 19) 間島地域における大倭教の信徒数に関して、日本側の資料によると、「国境地方視察復命書」（朝鮮総督府、一九一五年四月）では、大倭教の信徒数が八〇〇余名、檀君教の信者数が八二〇余名となっており、『間島事情』（東洋拓殖株式会社、一九一八年）では六八七名、「東部間島及咸鏡南北道特別調査報告書（二）」（朝鮮総督府中枢院、一九一九年）の「鮮人の宗教」では七〇〇名、『満洲及西比利亚地方に於ける朝鮮人事情』（朝鮮総督府内務局社会課、一九二三年二月）では七七〇名と記録されている。また、一九三七年に満洲国内で布教許可を得るために大倭教側が満洲国政府当局に提出した報告書によると、一九三七年六月末の時点で満洲国内の信徒数が総一六一六四四名となっている（『六十年史』四三五～六頁）。
- 20) 徐一の経歴については、「白圃宗師の著述と略歴」『六十年史』（三八八～九三頁）のほか、（注 11）にあげた論著を参照した。
- 21) 千敬化『韓国人民族教育運動史研究』（白山出版社、一九九四年、二五頁）。
- 22) 『韓国独立運動史資料三八（宗教運動篇）』「国内、中国東北地域宗教運動」機密第一七〇号：金奎植ノ大倭教振興策ニ關スル件」大正一一（一九二二年）五月二日（韓国史 DB にて検索引用、頁番号記載無し）。
- 23) 大倭教では、教団内の位階として、上から「司教」「正教」「尚教」「知教」「参教」の五つを定めた。これらの位階は「教秩」と称された。すぐれた信徒に対しては通常の段階的な昇進過程をとらずに、飛び級で昇進が行われることがあり、これを「超秩」と称した。その他、教団への貢献度や修道段階に応じて、「神兄」「喜兄」「道兄」「大兄」の四つの教号が設けられた。「神兄」「喜兄」「道兄」は、解放前の歴代教主たちだけに与えられ、「大兄」は司教や正教たちに与えられた（『六十年史』三一九～二〇頁）。なお、本稿の「表 1」に出てくる「正教加大兄号」とは、「正教」の教秩で、しかも「大兄」の教号が与えられたという意味である。
- 24) この逸話は、九月山三聖祠における羅喆の自決について詳述した、金教献編、尹世復訳『弘巖神兄朝天記』（大倭教総本司、二〇〇二年、四五～八頁）に記されている。
- 25) 以上、金東煥「大倭教 抗日運動の 精神的 背景」（『日帝下 満洲地域에서 大倭教의 抗日運動』二〇〇一年一月、一一四頁）を参照。
- 26) 大倭教では教主のことを「都司教」と称した（『六十年史』三一九頁）。
- 27) 大倭教では、教理に造旨が深く人徳の高い者へ特別に「教宗」が与えられた。教宗には「大宗師」と「宗師」の二つがあった（『六十年史』三一七頁）。「大宗師」の称号は大倭教を創設した羅喆に、「宗師」の称号は徐一・金教献・尹世復に与えられた（各人の号を用いて、弘巖大宗師・白圃宗師・茂園宗師・檀崖宗師と称された）。この中で、金教献と尹世復は歴代教主（都司教）とつとめた人物であった。つまり、徐一には歴代教主と同等の尊称が与えられたのである。
- 28) 以下、北路軍政署における徐一の活動については、朴烜、前掲『満洲韓人民族運動史研究』九〇～一二〇頁を参照。
- 29) 金龍国「大倭教と独立運動」（『民族文化論叢（鸞山李殷相博士古稀紀念論文集）』三中堂、一九七三年、一九五頁）。
- 30) 朴烜、前掲『満洲韓人民族運動史研究』九一頁。
- 31) 玄天黙は一九一〇年に間島へ渡った後、徐一に出会って大倭教に入信し、一九一一年一月に参教、一九一三年四月に知教、一九一七年五月に尚教、一九二七年一月には正教の位階についた（『六十年史』八九八～九頁）。
- 32) 朴烜、前掲『満洲韓人民族独立運動史研究』の「表 22：重光団が設置した教育機関一覧表」（九三頁）を参照。

- 33) 『不逞団関係雑件-朝鮮人ノ部-在満洲ノ部(二三)』「機密第二九二号: 間情第三七号」大正九(一九二〇)年一月九日(韓国史DB、原文Image七~一〇頁)。
- 34) 『不逞団関係雑件-朝鮮人ノ部-在満洲ノ部(五)』「機密第六四号: 不逞鮮人暴動陰謀ニ関スル件」大正四(一九一五)年二月八日(韓国史DB、原文Image一三頁)。
- 35) 朴烜『金佐鎮評伝』(신인, 二〇一〇年、八三頁)。
- 36) 金佐鎮に関しては別稿で詳しく論じる予定であるので、本稿では詳述を避ける。金佐鎮の経歴と青山里戦闘については、姜徳相『(新装版)朝鮮独立運動の群像』(青木書店、一九九八年)の「青山里大捷の將軍・金佐鎮」(一〇四~一三〇頁)に概説されている。
- 37) 「政府」と称する機関をただ一つにする必要があり、「軍政府」は「軍政署」という名称に変更された。この時、西間島(鴨緑江北岸の南満洲地域を指す)の扶民団と新興武官学校を中心に組織された独立軍は、西路軍政署として改編された。この二つの軍政署は一九二〇年五月に提携関係を結び、臨時政府の正規軍として相互に扶助し合うことが約束された。『不逞団関係雑件-朝鮮人ノ部-在満洲ノ部(一八)』「機密第一二六号: 東、西間島軍政署聯絡ニ関スル件」大正九(一九二〇)年六月一日(韓国史DB、原文Image一~三頁)。西路軍政署という名称と対にして、大韓軍政署は北路軍政署と称される場合が多かった。この慣例にならない、本稿でも北路軍政署という名称を使用した。なお、西路軍政署の代表をつとめた李相龍も大倥教徒であった。北路軍政署と西路軍政署の独立運動家たちは、大倥教の檀君信仰によって固く結ばれていた。これに関しては、拙稿「亡命ディアスポラによる朝鮮ナショナル・アイデンティティの創出-大倥教が大韓民国臨時政府運動に及ぼした影響を中心に」(『朝鮮史研究会論文集』第四三集、二〇〇五年一〇月、一一二頁)を参照。
- 38) 北路軍政署と臨時政府との提携関係については、金谷達、前掲「青山里大捷에 대한 臨時政府의 対応」一三一~二頁を参照。
- 39) 『不逞団関係雑件-朝鮮人ノ部-在満洲ノ部(二〇)』「機密第二〇三号: 不逞鮮人根拠地並ニ各団組織ニ関スル件」大正九(一九二〇)年八月一日(韓国史DB、原文Image九~一〇頁)。
- 40) 『不逞団関係雑件-朝鮮人ノ部-在満洲ノ部(二一)』「高警第二三七九二号: 間島地方ニ於ケル不逞鮮人団ノ情勢ニ関スル件」大正九(一九二〇)年八月二六日(韓国史DB、原文Image九~一〇頁)。
- 41) 『不逞団関係雑件-朝鮮人ノ部-在満洲ノ部(二二)』「機密第三四号: 軍政署ニ拘禁セラレ居リタル朝鮮人ノ談話ニ関スル件」大正九(一九二〇)年九月二五日(韓国史DB、原文Image八頁)。間島の銅佛寺で雑貨商を営んでいた金洛弼は、日本側の密偵に間違われ、北路軍政署に監禁された後、脱出して日本の間島領事館に保護を求めた。その際、北路軍政署の内部事情について詳細な証言をしている。これはその時の証言によるものである。
- 42) 国史編纂委員会編『韓国独立運動史』三、一九六七年、六三〇頁。
- 43) 李鴻来は北路軍政署の軍資金募集に最も大きな功績をあげた人物であった。彼はまた、羅喆が一九〇五年に企てた乙巳五賊暗殺計画に直接関与した人物でもあった。李鴻来の自叙伝として、심현『李鴻来義士小伝』(靑林閣、一九七九年)がある(신운용、前掲「大倥教人徐一의 対日抗戰과 그 意味」二五八頁を参照)。
- 44) 李顯翼「大倥教人斗 独立運動淵源」(国学研究所編『알소리』第一〇号、한뿌리、二〇一一年三月に掲載)の「大倥教人の 独立運動概要」(一三二~一五一頁)では、北路軍政署に所属して独立運動に従事した大倥教徒として、嚴活(檀雲)、韓基昱(湖亭)、崔益恒(心溪)、金永肅(白舟)、姜鐵求(海山)、李昌彦(白香)、權寧濬(亞峴)、張裕淳(野隱)、黃学秀(夢湖)、沈權(心岩)、玄天極(白軒)、崔澤(東山)、蔡五(樞圃)、玄甲(東坡:玄天黙の長男)、朴魯賢(南樂)、梁玄(元圃)、金熙均(檀園)、全在一(鏡石)、池弘(雨降)、李成宇(白初)、公昌準(心淵)、金鳳林(松坡)、尹珣鉉(友松)、金虎(嘯林)、金盛鎬(鐵舟)、崔時彦、禹德淳(檀雲)、李世植(一海)、嚴柱天(普本)、吳光鮮(翠松)、張道淳(一胎)の名前を記している(括弧内は号をあらわす)。なお、この資料は、大倥教徒の李顯翼が自分自身の体験や伝聞をもとに一九六二年に著述した手稿本であり、細部において歴史的事実と異なる部分がある。上に列挙した人物については、大倥教の名簿資料で名前が確認できなかったために、[表1]には掲載しなかった。しかし、李顯翼は一九二四年に中国吉林省敦化县に移住し、金佐鎮・金赫・羅仲昭・鄭信らと北路軍政署の後続組織とも言える新民府の設立に関与している。このことから、この記述は全く根拠のないものではないと考えられる。
- 45) 『不逞団関係雑件-朝鮮人ノ部-在満洲ノ部(一六)』「機密第一四号: 間島ニ於ケル不逞鮮人ノ団体ト其ノ動靜ニ関スル調査進達ノ件」大正九(一九二〇)年三月二九日(韓国史DB、原文Image一八

- ～九頁)。
- 46) 李顕翼、前掲「大宗教人斗 独立運動淵源」九二頁。玄圭煥『韓国流移民史』(語文閣、一九六九年、五六九頁)にも「東一道本司所属」と記されている。また、臨時政府運動で活躍した大宗教幹部・朴賛翊の息子である朴英俊も金佐鎮將軍が大宗教人であったことを証言している(차옥승『天道教・大宗教』서광사、二〇〇〇年、一六六頁)。
- 47) 玄圭煥、前掲『韓国流移民史』に「東二道本司(徐一領導)、沿海州：洪範図」(五六九頁)と記されている。
- 48) 李顕翼、前掲「大宗教人斗 独立運動淵源」九六頁。
- 49) 『不逞団関係雑件-朝鮮人ノ部-在満洲ノ部(二三)』「秘受一四〇三六：間情一不逞鮮人ノ行動」大正九(一九二〇)年一〇月一六日(韓国史DB、原文Image二頁)。
- 50) 『不逞団関係雑件-朝鮮人ノ部-在満洲ノ部(二六)』「秘受一五〇二号、高警第一〇〇七号：国外情報、大韓軍政署ノ日誌ニ関スル件」大正一〇(一九二一)年一月二九日。姜徳相編『現代史資料(二七)』(みすず書房、一九七〇年、三七八～三八八頁)に『陣中日誌』として掲載されている。以下、この日誌からの引用は、本文中に『現代史資料(二七)』に掲載された頁数のみを記す。
- 51) 『不逞団関係雑件-朝鮮人ノ部-在満洲ノ部(三八)』「機密第九九号、機密受第一〇七号：大韓独立軍団參謀李楨ノ陳述セル金佐鎮ノ行動及一般不逞鮮人団ノ情況等ニ関スル件」大正一三(一九二四)年四月九日。なお、この報告書では、李楨について「本年一月敦化県ニ来リ行動中感スル所アリ三月二十七日曾テ交際アル当館末松警視ノ許ニ自首申告ヲ為シ帰還方ニ就キ請願シ来リタルヲ以テ取調ヲ為シタ」(韓国史DB、原文Image一～二頁)と記されている。篤実な大宗教の信徒であった李楨が、なぜ「末松警視の許に自首申告」をしたのか大きな疑問が残る。今後の研究課題と言えよう。
- 52) 一九四二年に満洲国内で「壬午教変」と呼ばれる大宗教弾圧事件が起こったが、彼はその際に日本側の過酷な尋問によって死亡した十人(教団側では「殉教十賢」と称する)の内の一人であった。『六十年史』(四八六～八頁)に彼の略歴が記されている。それによると、彼は一九一四年(二〇才)に大宗教に入信した後、一九一八年に靈戒を受け參教の位階につき、一九二二年に東二道本司の宗理監正、一九四二年に知教の位階についている。また、一九二〇年(二六才)三月に北路軍政署士官養成所速成科を卒業した後、同年四月から汪清県公立第十小学校長として六年間就任した。一九四二年一月に日本の警察に逮捕され、満洲国内の掖河監獄に八ヶ月間拘束された後、一九四三年に釈放されたがすぐに病死した。解放後の一九四六年に尚教の位階に追崇されている。
- 53) 李範奭『鐵驥李範奭評傳：우등불』(三育出版社、一九九二年、一八三頁)。
- 54) 朴永錫、前掲『日帝下独立運動史研究』一四二～三頁。

資料4 学習の手助け | 徐一北路軍政署総裁との仮想インタビュー

記者：今回青山里で大勝利を取めたことをお祝い申し上げます。まず今回の大捷の戦果を簡単にお話してください。

徐一：正確にはわからないが敵の連隊長を含む、1200人以上を射殺しました。それに比べて、わが軍は戦死60人、負傷者は90人余りにしかありません。

記者：本当にすごい戦果ですね。今回の戦いで味方が大勝利を取めた理由は何だと思いますか。

徐一：われわれが勝利した理由はいくつもありますが、何よりも戦いに臨む精神の姿勢が違っていました。敵は戦いを恐れて自分の命を守ろうとする心だけが先に立っていましたが、わが独立軍は自らの命を投げ打って民族を解放させるという一念で勇敢に戦いました。結果は明らかでしょう。

記者：今回の勝利の一番の功労者は誰ですか。

徐一：ははっ、当然のことを聞きますね。わが独立軍は戦っている間、飯もろくに食べられず、一日に100里を超える険しい山道を走らなければなりません。今独立軍の中で足が凍傷にかかっていない者はいません。ところが誰もこれを恨まずに互いを信頼して激励してくれます。どうして1、2人の功績でしょうか。また、わが独立軍の世話をしながら、さまざまな情報を知らせてくれた閩島同胞の功績も忘れてはなりません。



徐一 (1881~1921)

図1 学習資料「徐一北路軍政署総裁との仮想インタビュー」

(出典：三橋広夫訳『韓国近現代の歴史－検定韓国高等学校近現代史教科書』明石書店、2000年、183頁)

